

人文会 ニュース

業務用

特集・読者にとって魅力ある書店とは

同じ「顔」の店ばかりでは面白くない／澤部英一 書店
人のパーソナリティーと読者／外山純一 読者にとって
魅力ある書店とは／土屋俊二 細やかな心配りを感じる
コーナー／島田栄 読者に対する情報の伝達を／山本雄
いくつかの書店のこと／匿名希望A 本を探す楽しみを
味わえる店／瀬戸俊一 一読者として思うこと／匿名希
望B “魅力的な書店”は必要じゃない／戸川安宣 片
隅にある一冊の本／匿名希望C 人間のやさしさをもつ
書店／小林登美枝 階段の途中の小さな書店／平川俊彦
私と書店／小川博 期待したい大型書店／匿名希望D

◆各委員会報告〈販売・特約店・宣伝・弘報各委員会〉

◆78年定期研修会の日程 ◆筑摩書房“休会”へ

’78. 9

21

麻生 誠著

エリート形成と教育

四六判／¥2000

政治学や経営学ではエリート研究が盛んである。本書は大衆社会においてエリートはいかに発見され、教育され、どのようなリ・グレーションをとって社会に貢献すべきかという、現代社会のエリート問題を教育社会学的観点から解明した書である

■好評既刊書より

■好評既刊書より

現代社會學

末吉悌二・新堀通也編	四六判／¥1600	新堀通也・片岡徳雄編	A5判／¥1600	斎藤正二著	A5判／¥2200
------------	-----------	------------	-----------	-------	-----------

福村出版

電話東京
813-3981

平凡社

〒102 東京都千代田区四番町4
振替・東京8-29639

中世を旅する人びと

ヨーロッパ庶民生活点描

阿部謹也著

定価1900円

牧人、ジプシー、放浪者、遍歴職人など旅に生きる人びと、農民、粉ひき、パン屋、酒屋など定住者の世界、そして渡し守、居酒屋、旅籠、共同浴場へと経巡り、中世民衆の人間生活を握り起し、民衆本ティル・オイレンシュピエルに庶民の笑いの肉声を聞く。前著『ハーメルンの笛吹き男』で垣間見た中世民衆の世界にさらに踏み込んで、人間と人間の関係の変化を探る。新たな社会史をめざす力作。

答えない質問

L・バーンスタイン 和田旦訳 17 cm LP 盤3枚付 2000円
 天才指揮者・作曲家のハーヴァード大学での講義。古典・
 民族・現代音楽を素材に、譜例と自らの演奏によって音楽
 の本質を語る。(ブック・アンド・レコード)の初の試み。

ベートーヴェンのピアノソナタ
エトヴィン・フィッシャー 佐野利勝・木村敏訳 三

バルトーク晩年の悲劇

アガサ・ファセット 野水瑞穂訳

フルトヴェンクラー 音楽と政治
クルト・リース 八木浩・荻津丈夫訳

1100E

11000EJ

1400ET

東京都文京区本郷 3-17-15 / 振替東京 0-195132

法政大学出版社

柳父 宣

翻訳文化を考える

過来るつ円
成てたし1300
形しに分
語抉品を
本を作す
日相学象察
訳様文現考
翻ならくを
の異かの造
で特語は簡
まの情と底
日化日こ基
今文、な
ら本がま化
か日者さ文
代に著ま
古程たさつ

H・デーミッシュ

現代芸術の原像

ソノ特と
マン早
ロー逸
ツに綜
イッ錯
ドリ術
たド芸
いて現
もリ代
埋フ現
もD.「
C.をウ
訳家当
輔画の
堅の明
佃照殊
の立

アフリカの宗教と哲学

著者はケ
省のアー
ツ、経済
者、哲學、
學問、開
闢、
宗教、
元宗、
森の、
大身、
／＼、
テ、
ビ、
ム、
ア、
J、
二

東京都港区南麻布2-8／振替東京6-95814

みすず書房

クルト・リース 八木浩・芦津丈夫訳

アガサ・ファセット 野水瑞穂訳

バルトーク晩年の悲劇

ベートーヴェンのピアノソナタ
エトヴィン・フィッツシャー 佐野利勝・木村敏訳 三

1000ET

11000EJ

1100E

東京都文京区本郷 3-17-15 / 振替東京 0-195132

読者にとって 魅力のある書店とは……

読者の側からの書店への提言

一兆円産業といわれる出版業界の生産商品は、年間十億冊に近い大奔流となつて、全国で一萬七・八千軒とも、二萬軒ともいわれる書店を通じ、読者と触れ合い、購われてゆく。しかしその壮大な出版物の奔流も、不況の深刻化とともに返品が増大、大型店の進出にともなう競争の激化など、生産手段や流通構造それ自体が徐々にではあるが変貌を遂げつつあるやにみえる。そして漠然とした危機感は、それぞれの思惑のなかで、幾多の試みとして具体的な現象を浮きあがらせる。人文会も、そうした試みをいくつか具現化し、いくつかの成功を収めてきたといえる。本号では表記のテーマで、会員社の愛読者、編集担当者に依頼し、読者の立場から「魅力」を感じる書店の条件を探ることとした。まずはご参考までにご一読をお願いしたい。



同じ「顔」の店
ばかりでは面白くない

澤 部 英 一

新聞広告を見てその本の刊行を知り、書店に買いに行くこともある。しかし、あらゆる新刊書が広告されるわけではないので、偶然の出会いを求めて書店の棚を覗くといったことの方が多い。

ここでつらいのが、われわれ五十年輩の視力の問題である。本の背の文字が、遠くて見えず、近くてまた見えないのである。眼鏡をかけても見えず、外ずしても見えないといったどうにもならぬ距離があるのだ。それを無理して眼をこらしつづけていると、ぐったり疲れてしまう。本さがしも、なかなかの労働であると思ふ。

ここでのをいうのが、本をさがしやすい店とさがしにくい店のちがいである。配列分類が合理的にできていて、少し見て歩くとお

のずから見当がつくといった店がいちばん助かる。それに引きかえ、なぜこんな本がこんな場所にいるようなアット・ランダムな並べ方をしている店もある。こういう店に限って、店員に質問しても要領をえたアドバイスが返ってこない。

店員の愛想のいいのに越したことはない。しかし、極端に言えば、書店に愛想を買に行くわけではないので、なによりのサービスは商品についての正確な知識である。

いつか、ある書店で、顧客と店員の珍問答を耳にしたことがある。

「あのゲーテの『若きヴェルテルの悩み』という本はありませんか」

とお客にいわれた店員が、「しばらくお待ち下さい」といってそこらを探したあげく、

「うちにあるのは『若きヴェルテルの悲しみ』ですね。『悩み』の方は切らしてまして……」と断わっている。いうまでもなく同じ本で、ただ訳者によって「悩み」にしたり

「悲しみ」にしたりしているだけなのだ。

魅力のある書店といえは、店内が明るいか、レジの処理が手速いとかも挙げられるが、結局は本がさがしやすいことと店員の商

品知識が豊かであることとの二つに尽きるのではなからうか。

* * *

ところで、「どんな書店がお客にとって魅力的か」という問題のベースには、「どんな商店が魅力的か」という、より一般的な問いがあるはずである。それはいうまでもなく、よい商品がより安く買える店である。しかし、書店の場合、こうした魅力とはまったく無縁である。その理由は、ひとえに再販制によるもので、本という商品はどこで買っても同じ値段である（生協という例外はあるが）。つまり、どこへ行ってもディスプレイの魅力はないのだから、買物に便利などころに立地し、たいていの本は揃っている店が、何を求めるにも好都合ということになってしまふ。いいかえれば、現状では、大都市のターミナルなどにみられる「本のデパート」化した大型書店が便利な店ということになる。

しかし、商売というものは、もつと頭を使えば、いろいろ方法があるのではないだろうか。デパートはたしかに便利には違いないが、たとえばヤングたちはジーンズを買いにわざわざデパートへは行かないだろう。たい

てい、街のジーンズ・ショップ（専門店）へ行く。その方がジーンズを買うというショッピング行動にふさわしい。本の場合も同じことがいえないだろうか。

私の所感では、どの書店をみても、大型・中型・小型の差異による品揃えの違いはあっても、みんな同じ「顔」をしているように思えてならない。同じような顔ばりの女性の中から、どれが美人と思うかといわれても戸惑うばかりである。

大阪梅田の地下街に紀伊国屋の二十坪の店「新刊だけの店」がある。これなどもひとつの斬新なアイディアである。この場合もたしかに立地が決定的条件になるだろうが、「フアッションと料理の本の店」とか「コミックの店」とか、さまざまな試みがあってもいいと思う。

はげしい競争をくりひろげている流通業界のなかでは、これまでの伝統的な商法ではない各種の形態が生まれている。本の場合も、これまでになかった斬新な着想に基づく書店づくりをしてこそ、真に魅力ある書店が生まれてくるのではないだろうか。そして、流通業の他の分野をみてもわかるように、激しい

競争のみがそれを生み出す母胎となるのである。
(有斐閣編集部)

書店人の

パーソナリティーと読者

外山純一

かつて芳林堂書店池袋店長であった柴田信氏が、雑誌「エディター」連載で「本屋というのも非常に個別的個性的です。書店も機能的に、個別的に捉えていくということは原則です。小売書店は必要に応じて機能の違う書店がたくさんあるわけです」と指摘しているのを読んで納得したことがある。

書店が流通機構の末端にあり、読者と本の直接の出会いの場であればあるほど人間味をもち、人間の貌をした個性的でなければという氏の意見はともすれば本を企画し制作されるレヴエルだけでみていた私には興味ある指摘だと思えたわけである。たしかに本というものが他の商品と違って「多品種少量生産」

であり、「個性的」なものであるということについて版元の人間も読者も了解し、積極的に納得するが、書店の個性の有無についてはないがしろにされるか、もしくは意識としては稀薄である。

しかし、氏の指摘する通り立地条件など外的要因によってか、書店人の本に対する意識によってか、いずれにせよ書店は個性的な貌をもち、機能をもって読者の前にあらわれ、読者の評価と批判にさらされるわけである。

それでは、書店の個性は何によって表現され、読者は感じとれるのだろうか。棚構成の特異さ、ブックフェア等で主張される本に対する独自の価値判断。あるいはできるだけ読者に本との出会いをふえさせるという意味で「点数」をおおく置くこと。それとも徹底して専門店化をはかり、出版情報に関して総合的なセンターとしての機能を受けもつこと。いろいろな意見があるだろうが、私は書店人のパーソナリティーとそれを信頼してやってくる読者との関係そのものだと思っている。

それは私のわずかな書店めぐり体験のなかの前橋・換乎堂と横浜・有隣堂外商センター

で見聞したことに由来している。前者は県都の中堅書店として地域社会のなかで独自の眼をもって文化にかかわっているし、後者は神奈川県を大部分を商圏とした外売専門部門だが、氣にとまったのはセンター内にあった医書センターであり、この二店に共通していたのは読者の個人的な興味から読書相談に応じ、読書計画にまでいたるアドバイスや出版情報をもとにした動向まで語りあいながら読者との関係を保っていたことである。

もちろんそういう書店といえども企業であり、売上増進のために積極的に読者と接触しようというのが端緒であったのかもしれない。しかし、たとえば出版情報についても概括的なものしか提供されず個人的な読書計画に対応できないのであれば日常的にそうした情報にふれうる書店人が、読者の要望に応じて見取図を話しあいながらともに作りあげていく、こういうパーソナルな関係をもちあえる書店という雰囲気は二書店はもっていた。

換乎堂では楽器販売も併せてやっているが、その一角にロビー形式のコーナーを設けそこで、応対で知りあった（とおぼしき）読者が岡田芳保氏を相手に話しこんで、結局数

冊の本を購入していった。それが何で、どこ
の出版社の本かは忘れたが、岡田氏の熱心さ
と本に対する見識の深さはいかへた。読者
とのこうした密接な結びつきは一般的な意味
での店のイメージアップにとどまらず積極的
な意味での読者の組織化といえるわけで、事
実かたわらで聞いていた限りでも「読書会」
的なものが組織されており、岡田氏が世話人
的な役割を果たしているかのように思えた。

物流と情報流通のギャップが最近とみに言
われ、その改善が進められているが、最も望
ましいのは物流機構の尖端である書店で情報
流通と本とがクロスすることだろう。そのた
めには本の世界に熟知した個性ある書店人が
必要であって初めてそうした機能をも与えう
る。その意味で煥平堂の例は稀有なものかも
しれぬが、大都市の大型書店ほどの店舗面積
がとれない中堅書店としてその個性ある店つ
くりはモデルケースといっている。

有隣堂Y M B Cの場合は対象が医書という
限定された本で読者も絞られてくるだけに、
比較的容易に読者との関係をつくっている。
以上の二つの例は立地条件、店舗面積、限定
された本を扱う専門書店というマイナ斯的な

条件を奇貨として、個性的な生々した人間の
貌をもった書店にしている。

本が著者、編集者、装丁者などの個性の総
和であればあるほど扱う書店人もまた個性的
でなければならぬ。それが読者にとっても
また本にとっても幸福なことだと思えてなら
ない。
(日本読書新聞販売開発室)

読者にとって

魅力ある書店とは

土 屋 俊 二

僕がやっと物心ついた頃(昭和三十年前
後)だと思いますが、都内の或るデパートの
なかにあるの書店では文庫本をわざわざシ
ーウィンドーに陳列して売っていたという記
憶があります。

それ以来20年?たちましたが、まさに隔世
の感があります。

さてこれまでに僕が気がついた書店の魅力
乃至特長をまづいくつか挙げてみたいと思

ます。

一、店に入りやすく、入ったからには品物
(本)を買わなくてはならないといった心理
的強制感がない事。

とにかく書店は気軽に入りやすく、しかも
宝の山に入る様な期待感を抱かせてくれるの
で、今だにワクワクしてしまいます。ただ、
店内に入った途端「いらっしやいませ」とい
われる店がありますが、僕などかえって面映
ゆい感じがして、何か買わなくてはすまない
といった負い目を起こさせるので有難迷惑な
気がします。

一、何時までいても追いつられない事。
書店で僕などは一・二時間位暇を潰すこと
がよくあります、書店の人には迷惑でしょう
が、喫茶店などで無為に過ごすより遙かに有
意義だと思えます。但し漫画類の立ち読みを
禁じている所も多いようですが、最近漫画
の立ち読みコーナーを設けて立ち読み奨励?
をしている店も多くなつたと聞きます。最も
ネクタイを締めた大人が漫画の立ち読みで追
い立てられたという話もあり聞きません
が。

一、店員が無理に客に品物を勧めない事。

これは本という他の種類の商品とは全く異質な性質（主に精神面だけに限りがある）のため読心術でも知らない限り、特定の品物を勧めるのが至難だと思うからだと思います。ですから書店では客はあくまで主体的でなければなりません。

ざっと以上のような点が主な特長だと思いますが、その他にも店頭がない本でも手数料をとらずに取り寄せてくれて、配達までしてくれる書店もあります。また書店はあちこちと気軽にに入れて、他の店との比較ができる点も特長の一つだと思います。

以上の点に加えて更に魅力的な書店となりますと、大書店（全国的・大都市的）と中小書店（地方的）とに分けなければならぬと思います。ここでは主に大書店を念頭に置いて希望する所を述べたいと思います。

まず、求めている本がないとか、見つからない事が一番困ります。ですから当然ながら本の種類・数は成る可く多く取り揃え、また探しやすくするために分類・仕分けをしかりして欲しく、また店内が混んでいても歩きやすいようにスペースをゆつたりととって欲しいと思います。

次に店員さんの事です。先に述べた様にあまり愛想が良過ぎても困りものですが、文庫売場などに時折、見受けられるぶつから棒をはやめて欲しいものです。（☆一つのプラトンは何千円もの新刊書より中味は濃いはずです）そして店員さん自身も本の内容をもっと知り、大の本好きになってお客が信頼して相談できる様になって欲しいと思います。

次にサービスマンですが、読者は大抵新聞・雑誌などの新刊案内・書評欄を見、且つ参考にして来る場合が多いと思うので、新刊コーナーは勿論ですが、五大紙の書評欄などに紹介されている本などは特別にコーナーを設けて書評とともに陳列して欲しいと思います。

ついで、どうしても古書店以外では手に入らない様な本がありますが、そうした本についての注文・相談に大書店が応じてくれたらと思います。（古書店から苦情がくるとは思いますが、ギブアンドテイクでやっていけると思います）。

次に些細な事かも知れませんが、某書店では確か二千円以上の本を買いお客には、読書新聞とか出版社のPR雑誌を付けてくれますが、こうしたサービスがこの次もこの店で買

おうという気を起こさせるので、そうした面も大切な事だと思っています。

最後に希望したい事は、先程少しふれた様に、出版物の宣伝・書評は出版社・新聞などの独占という形ですが、書店側でも独自に推薦する図書を、読者参加という形も含めたもので新聞にのせるとか、週報・月報などを発行して、営利にとらわれず良書を推して欲しい事です。そうすれば書店の個性も外観だけでなくずっと強くなるでしょうし、読者の方もその書店は金儲けだけのために商売しているのではないんだな、といった好印象をもち、その書店のファンになるのではないでしようか。（立教大学・学生）

細やかな心配りを 感じるコーナー

島田 栄

しばらくやっていないことに気づいたが、これまでときどき蔵書の並べ換えをした。そ

のとき最も関心を向けている主題に従って、あちこちの書棚から選び出しながら並べていく。読み残していた本の多さにあきれたり、内容を忘れていた本を発見したりして、次の読書計画を樹てる。こんな時間が好きだ。書店の棚に向かったとき、本の配列に私の関心と共通した意図が読みとれると、とても嬉しくなる。私の蔵書の新たな配列を空想して、目の前の書棚？、思考を往復させながら、蔵書の欠落部分を何冊か見つけたすと、どうしても欲しくなってしまう。そんな買い方をすることもある。本の内容を心得ていて、工夫された配列をしてくれている書店に足を運ぶ楽しみ、これはかなりぜい沢な注文かもしれない。私の問題関心に一般性があるとはいえないのだから。

これまで私が興味を寄せ、少なくない量を買ってきた分野は、歴史関係と社会運動・社会思想史だと思ふ。これらの分野は、書店であまり大事にされているとは思えない。小さな書店では一つの棚をも占領していることは少なく、大型書店でもかなり奥の一角を占めるか、上の方の階に追いやられているからである。それ自身はとりたてて悪いとは考えて

いない。かえって静かに本と交歓する場所を確保しやすいとさえいえるからだ。腹だたしいのは、少ない本が離ればなれに置かれていることが多いことだ。

ところで、日頃立ち寄ることが多いのは、勤務先のある神保町の各書店と、自宅に近い船橋の書店だろう。以前は途中下車して市川の書店に足をとめることがあったが、私の眺めたい本がしだいに少なくなってきたように感じた五、六年前からあまり行かなくなつた。必要な本を探がすのには、神保町の書店街でこと足りるし、特殊な本は古書店を丹念に廻れば、見つけることができる。だから乗換え地点の船橋では、通路に面していることもあつて構内の書店で、帰宅途中の一息を入れることが多くなる。ここは私が興味を持つ本が比較的多く置いてあるし、雑誌のコーナーを除けば混雑はひどくなく、ことに私が足を向けるコーナーは、通勤の疲れを癒しながら、帰宅後のわずかな読書時間を充実させるための心の準備をするゆとりがある。数日前にコーナーが移動してとまどつたが、以前より眺めやすくなり、本の配列にも心配りが感じられるようになった。

残念なことは、最も入店する機会が多い神保町の書店街に、まだ気に入ったコーナーを発見できていないことである。周囲にある古書店とつい比べてしまつたためか、個性を感じられないことの不満がつる。あまり足を向けることがないために、かえって強い印象を残しているのかもしれないが、池袋西口の書店の四階で味わたつた楽しさが思いおこされる。とりたてて珍しいことではないが、地域別・主題別に配列されたコーナーに細やかな心配りが感じられ、点数も比較的多く思われ、足もとから頭上高くまで眺めまわす苦痛は忘れてしまい、その折の私の関心に見事応えてくれたように思われた。

大都市にある書店に比して、地方都市の書店経営は困難な条件が多いだろう。三年ほど前、入院した父の付添や見舞のため、長野県の上諏訪に行くことがたびたびあった。この街で六軒の新刊書店に入つてみた。大手が文房具店と兼業で、目当てる人文図書は無いに等しかったが、比較的大きい二店で地方出版物のコーナーに目を奪われた。そのなかの一家に入るが多くなり、父と私の読む本をかなり購入した。それは著名な作家やベスト

セラ―類に押し込められたかのようにひっそりとだが、地味な作家の作品やエッセイなどが比較的多く並べられていたからだろう。

(青木書店)

読者に対する情報の伝達を

山 本 雄

本屋さんというところは、およそあらゆる商売のうちでも、一番奇妙なところのように思えます。ぶらりと入って、三〇分や一時間も店の中をうろついていても、よほど小さなお店は別として、何ともいわず、店員の方も、客にあれこれ勧めることもありません。ほかのところで、こんなことをしていたら、追い出されることはないにしても、きつと、いやな顔をされること請合いです。

とはいっても本を買う客のほうからすれば、本屋さんのあり方によって、好き嫌いが

あることもたしかです。それも、何か目的があつて――つまり、これを買わなくてはならないと思つて――店に入ると、何となく立寄つて、おもしろそうな本を探すときは、また別のようです。

ですから、何がしかの本を買うときには、大型店舗にいけば、ある程度目的が達せられることはたしかですが、大きいことは必ずしもいいとは限りません。たとえば大きいところは、往々にしてフロアが分かれていて、それだけでおつくうになりがちです。具体的に例を挙げれば、紀伊国屋の梅田店や福岡店のようになん・フロアで用が足せるところはむしろ例外のようです。

それに大型店は、場所もいいところであるだけに、人も多く、ただただ、目的の本をみつめるだけですんでしまい、それ以上、ゆつくりほかの本を捜すことはできないようです。だからといって、大出版社のマスプロ商品はから地方小出版社のものまで、揃っているのは必要でもあり、ありがたいことはいうまでもありません。

でも、本好きにとつて、一番嬉しいのは、ゆつくり、実物を見ながら、気に入ったもの

を心ゆくまで選べる――そんな雰囲気を作つてくれる本屋さんです。それとあの店にいけば、××出版社のものなら必ず揃えてあるとか、歴史の本であるなら、まず揃っているとか、雑誌のバックナンバーもあるとか――。やはり、新刊書ばかりを扱っているとはいへ、なにがしかの特徴があることが要求されているのではないのでしょうか。そういう点では、岩波書店とか有斐閣のように小売部ないし専門販売店のあるところはいいと思います。

読者からいうと、本屋さんには、単に本を売るだけでなく、読者に対する情報伝達する役目もあるのではないのでしょうか。各版元は程度の差はあれ、読者に対して一所懸命にメッセージを伝えようとしています。各社のPR雑誌はその典型でしょう。図書目録や月報はどんな小さな出版社も持っている筈です。そういうものをできるだけ置いておいて欲しい。それだけでも、その店のイメージはだいぶ違ってくるように思えてなりません。

この頃本屋さんについて一番気になるのはなんといっても、店員の人の商品に対する知識という情報が不足していることです。こ

れだけ、多種多量のものがあふれているので
すから、無理といえは無理なのかもしれませ
んが、大きな店だったら、各コーナーに一人
ぐらい、ベテランが居て、客の需要に応える
ようにしてもらいたいと思います。むづかし
いことでしょうか。（日本評論社編集部）

いくつかの書店のこと

匿名希望 A

本に対してある種の思い入れのようなもの
をいだいているのか、他の商品を売る店とは
違ったものを本屋に求めているようなところ
がぼくにはあります。それをひとくちで言う
のはむづかしいけれども、一冊の本に出会
い、そこで思いがけず新しい世界を垣間見る
ことがある。そのようなひとつの出会いの場
として本屋がある、ということのようです。
ここで、行きつけというほどではないが比
較的よく足を運ぶことになった本屋の、その

「魅力」の中身はいったい何だろうと考えて
みると、店員さんが親切であったという、ご
くあたりまえのことにいきつくようです。す
べての本が間違いなく揃っているということ
に魅力を感じることは、ぼくの場合まずあり
ません（仕事上や何かで必要が生じて行く場
合は別ですが。また、本のことなら何でも知
っているという生き字引のような店員さんを
求めているわけでもない。今日のように毎日
夥しい数の本が出版されるというような状況
の下では、その著者や書名を覚えるというの
は実際は無理なことでしょう。ぼくが求める
のは、読者のたどたどしい問い合わせや相談
にあまり面倒がらずに乗ってくれる店員さん
です。書名と著者名・出版社を確認して棚を
調べ、目録を繰って倉庫に問い合わせの連
絡をする、それを正確かついねいにやって
くれる店員さんを見るとホッとします。

この意味で、いつでもどの店員さんも面倒
を厭わずに調べてくれるところとして、東京
堂書店をぼくはあげたいと思います。いつの
ことだったか忘れてしまいました、かなり
前に出た本をさがして店員さんにたずね
ると、それは××叢書の一冊でしょうとおつ

しやる。ぼくの記憶では××叢書の中のもの
ではなかったし、そのことも伝えたんです
が、どうも××叢書だと思い込まれたよう
で、いろいろとさがしておられる。それから
だいぶして、彼は汗をふきふき、さがしてい
た本を持って来てくれた。結局、叢書とは別
のものだったわけですが、ひじょうにうれし
かった。その時は思わず顔を見合わせて笑っ
てしまいました。

ところが、これと逆の事象となると、あげ
るのに事欠きません。在庫をたずねると、す
ぐ横の別の店員さんに聞き、その人が首をか
しげると「置いてありません」と言う。ある
いは、たらい回しにされる。また、まるで投
げるようにして本を客に渡す店員さんを見か
けることがよくある。情報も早くキャッチし
ているし、サービスも全体として向上してい
るでしょうが、本（商品）に対する思いやり
に欠けているのではないかという印象を持ち
ます。

だから、何から何まで揃っていて店員さん
が何でも知っているというのは必ずしも重要
なことではない。たしかにそういう本屋もあ
ったほうがいいでしょう。けれども、あそこ

でなら安心して買うことができるという感じをいただくのは、目には見えないコミュニケーションの場が、読者と本屋、それから間接的だけれども出版社・著者との間に拡がりつつある時だ、と言えるように思うのです。そこに、本にかかわる者たちのひとつの大きな喜びがあると同時に、それは、キメの細かい地道な活動の果てにはじめて可能になるものなのでしょう。

それからもうひとつ、スペースなどの制限を受けながら、いろいろなフェアを企画しているところとして弘栄堂書店があります。吉祥寺の弘栄堂書店は学生の頃から最も利用した店ですが、通りかかると、何かふと目につくようなことをしている（シュール・レアリスム・フェア、旧定価本、小出版社の本……など）。たった一つの棚を使っただけの小さなコーナーですが、ただ漫然と本を売っているのではないという姿勢がうかがわれて、たいへん気持ちがいいものです。

そうした書店とは比較にならないほどの広さと人員を擁しながら、大きな書店がなかなかそういった催しをやってくれないのは残念なことです。

一昨年でしたか、旭屋書店水道橋店が自分たちで選んだ図書フェアをやり、西武ブックセンターが「人文会編集者が選んだ一〇〇冊の本」という特集を昨年の春にやりました、ひじょうに新鮮でした。本の選択について、もつと書店が自主性を持ってもいいのではないか、ぼくはそう思います。

さきほどの弘栄堂書店の場合だと、詩の関係と社会評論関係は昔から変わらずよく集めてありますし、大きい書店でも、その書店独自のカラーを出すようなコーナーを設けることはできるのではないでしょう（西武ブックセンターは伝統的に小フェアをやっているようです）。

その他、たまたま立ち寄ったところで、福岡の紀伊国屋書店、熊本の紀伊国屋書店、神戸三宮の淳久堂書店は、わりとよく本が整理してあって見やすく（地方の書店に限らず、この分類がうまくいっていないことが実に多い）、情報も幅広くつかんでいるように思えます。中央から流れてくる情報に左右されない、その地域に根ざした今後の活動を期待したいところ（編集者）です。

本を探す楽しみを 味わえる店

瀬戸俊一

正確なデータを持っているわけじゃないけれど、本屋というのは、いわゆる「ひやかし」の客がいちばん多い店なんじゃないだろうか。自分自身のことを考えてみても、今晩読むものを何か……なんていうのはいい方で、たいていの場合は何も考えずに書店に足が向く。お金が全然ない時だって、本屋にだけは安心して入って行ける。

中学生のころは毎日のように、乗り換えの横浜駅で降りては、本屋にひっかかって立ち読みをした。いまとは全く違って、名店街の奥の方にあった小さな栄松堂が唯一の書店だった。本を買うつもり時には、自宅のある私鉄のひと駅手前で降りて、二、三軒の古本屋を廻った。それで毎日暗くなってから帰るものだから、たまに早く家に着いたりすると

不思議な顔をされたものだ。

『本屋がぼくらの教室だ』という文句を、植草甚一さんの本のおびに書いたときに、柄にもなく、そんな昔のことを思い出してしまったが、ほんとにずいぶん本屋さんでは勉強させてもらったものだ。

雑誌売場というのはどこでも混んでいて、一冊の映画雑誌や音楽雑誌を数人でとり囲んでキアキア騒いでいる女学生とか、マンガを片端から読みまくっている子供たちとか、色々だ。ぼくだってその頃は、二十日になると五種類の写真雑誌をぜんぶ立ち見して、結局買うにしても、読み散らかした上の方のをどけて、下の方からきれいなのを探してレジへ持っていくたりしてたから、おたがいさまで、そんな混雑にうっとうしい感じはしても、あまり気にはならない。

こんな風に立ち読みをしていると、いろんな人が本屋に来ているのがわかる。半分以上は、本を見るより他の人を見ているのかも知れない。いっしょうけんめいメモをとっている人もいれば、じつくり腰をすえて小説を読んでいる人もいます。

落ちついて立ち読みのできる店、なんてい

うと、本屋さんにはたいへん申しわけないようだけれど、だれでもこんな気持をもっているんじゃないだろうか。立ちっぱなしも大変だから、できればゆっくり座ってお茶でものみながら、なんて素晴らしい。

ぼくはけっして本を大事にするほうじゃない。たいていの本は実用品だと思ってるから、読みさしのページはギュッと折り込んだり、やうし、わざわざかけてくれるカバーも、持って帰ったとたんに肩かごへ直行だ。昼寝の枕はもちろん、積み重ねて踏み台がわりにもつかう。部厚い文庫本なんかは読みやすいように引きちぎったりもする。

でも、これは自分の本だからのことで、書店にある本が傷ついているのを見ると悲しい。函入りの本なんか、二、三度乱暴に出し入れされると、もう無残な姿でみていられない。読み終った本をボーンと放り投げる人。このごろは腹もたたなくなったけれど、少し前までは、何げなく戻された本が、もともと違う所に置かれるのさえ気になって、それでも何とはなしに恥かしくて、お店の人に見つからないように、そっと棚の本を並べかえたりした。

このごろでは、同じ種類の本を並べた何々コーナーというのがよく目につき、それぞれ書店の個性を反映していて、たいへん楽しい。こんな所をゆっくり見ていくと、思いがけない本が見つかったすっきりうれしくなってしまうことがある。探している本が見つからないと、店員がよく知らないから困る、なんて怒る人がいるけれど、目的の本に突進するだけじゃなく、知らない本を探す楽しみが味わえるのが、本屋さんのいいところじゃないだろうか。

(横浜市・一読者)

一読者として思うこと

匿名希望 B

学生時代はよく古本屋さんや生協、大学の近くの書店を利用したけれど、今はもっぱら新刊書の書店が中心です。それというのも、経済的に少しは余裕の出来たこともさることながら、時間的に余裕のなくなったことが最

大の理由のようです。つまり会社の終るのが遅いので平日行くのは夜遅くまでやっている所ということになります。本当は家の近くの書店でゆつくり、というのが理想的ですが、そういう書店も見当らず、新宿ですら夜八時以降開いている書店はなく、勢い地袋駅にある書店へ行くことになりました。都会の生活が夜型となり、終電車が満員の今日、せめてターミナル駅の書店ぐらいいはもっと遅くまで開いておいてほしいものです。杉並の方には深夜までやっている書店があるそうですが、社会人にとってはうらやましい限りです。

そんなわけで、書店を選ぶポイントの一つは営業時間となっているわけですが、あとはやはり常に豊富な量の本が揃えてあって、行けばいつでも欲しい本があることということになります。小さな書店でも、分野ごとにきちんと整理されていて、必要と思われる本が値段や売行きに関係なく揃っている書店は魅力的です。

それにはやはり書店の店員さんの方が本が好きであること、内容に関して広範な知識を持っておられることが第一かと思えます。そういう書店は安心してゆつくりと本を探せま

す。また小さなことです。が、文庫及び選書等には各出版社ごとの目録をつけておいていた

だきたいものです。たとえ買わずとも見るだけで読書欲の起こるように本が整理され、新刊書でも一年たたぬうちにすぐなくなることはない書店へは、足を運んでいくら時間を割いても損をしたという気にはなりません。逆に万引き対策等に躍起になって、お客をジロジロ監視しているような雰囲気のある書店は、やはり行きにくいものです。古書店あるいは、一分野専門の書店（星和書店や詩、童話関係の専門店、パルコの「ばらうる」のような）それぞれの顔をもった個性的な書店が、これからどんどん出てきていただきたいものです。

『魅力的な書店』は必要じゃない

戸川 宣
『書店通い』が始まったのは何日の事だっ

たか、定かでない。が、それが日課となったのは、下町の実家から池袋にある学校に通う様になった中学一年の春からだった。当時（というのは今から二十年近く前の事）、駅と学校の間には大地屋と芳林堂という二軒の書店があった。この二店を放課後、通って帰るのが常となった。といっても、必ず本を買った、という訳ではない。ただ書店の棚を何日からか習性となったコースに従って巡回するだけの日も多かったのである。その頃手にしたのが、現在は編集する側に回っている創元推理文庫だった。ファースト・コンタクトはディクスン・カーの幽霊屋敷。中学二年の春、地元の集文堂書店でだった。それから後は、奥付広告を頼りに、先ずはカーの作品を買ひ漁り、続いてエラリー・クイーンやヴァン・ダインへと移って行った。学校の帰りに芳林堂で、日に一冊ずつクイーンの国名シリーズを購入していた頃がなつかしい。そのうちに、東京創元社が潰れた、という噂が耳に入った。中学二年の秋であった。倒産とはどういう事かよく判らなかつたものだから、最先に思い浮かべたのはもう創元推理文庫が読めなくなるのではないか、という不安だっ

た。というよりも、もっと具体的に、当時熱中していたカーの、近刊となっていた『盲目の理髪師』がこれで読めずじまいになるのかという気懸りであった。だから、棚から推理文庫が無くなってしまいう前にと、急ぎ立てられる様に本を買った。幸い東京創元社は新社となって再起し、『盲目の理髪師』は色刷りカバー付で刊行された。飛びついて買い求めたのは言うまでもない。

高校は埼玉県志木にあつて、池袋から東上線を通った。志木にはその当時、学参物と少しの書籍を置いただけの小さな書店が一軒あるきりで、結局は中学時代と同じく芳林堂通いを続けた。ただし、その先の大地屋までは足を伸ばさなくなった。この頃、一日一冊ずつ岩波文庫を読破するのだという友人に誘われて、岩波の百冊の本を片端から読み漁ったりもした。といっても僕は読む速度が遅くて、年に百五十冊程度がやっとだった。それに浮気っぽくて一冊の本だけでは物足りず、常に二、三冊の本を並行読みしていた。下町の家から常磐線、山手線、東上線と乗り継いで正味一時間。この車中で一冊、学校で一冊、そして帰宅してから一冊、といった塩梅

である(学園紛争で最後の年のほとんど、授業のなかった大学時代には、四、五冊を机の上に積み上げて、交互に読んだものだ)。当時、推理小説の方面では、ハヤカワ・ミステリを主に、創元の新刊やカッパ・ノベルスなどの日本物にも手を伸ばしていた。芳林堂の新刊平積み台で、私は事件の探偵であり、証人であり、被害者であり、そのうえ犯人でもある……という魅力的な惹句の『シンデレラの罫』を見付け、むさぼる様に読んだのは高校二年——乱歩さんが亡くなる前年であつた。

大学に入るとまた池袋に戻った。かくて僕の芳林堂——大地屋通いが復活する。それも時間的には中学時代よりはるかに余裕ができたのを幸いに、日に二往復は欠かさなかつた。更に別のルートも加わった。行動半径が拡がったのである。その主なるものは銀座コースだった和書に洋書も加わって、イエナから近藤書店に回り、ヤマハでレコードやシュワンのカタログなどを見て帰る。この中間に二、三軒のコーヒー店が挟まる、といった具合だった。レコードやコーヒー話は別に譲るとして、この時期にはまた、当然の如く神田の古

書店巡りが加わった。

卒業後、東京創元社に入社した。九年間読者として付合ってきた本の編集に、従つて今年で九年従事して来た勘定になる。会社は飯田橋にあるが、相変わらずイエナ・近藤書店通いが続き、日本橋の丸善が追加された。そして通勤途中の上野、御徒町コースが新設されることになる。今では同地区に四店もある明正堂も、入社当時はまだ二店だった。

数年前、吉祥寺に転居した。十分程違う方向に歩くと一軒ずつ小さな書店があつただけの下町から、十分歩けばデパートが三軒もある町へ引越したのだ。家に帰る途中の駅ビルに弘栄堂があつて、毎晩の様にここを通る。休日には光陽館や東急デパートの中にある紀伊国屋書店をのぞいてみる。これが現在のコースなのだ。

こうして、僕の書店通いを振り返つてみて、さて自分にとって魅力的な書店の条件とはどんなものだったか、と考へてみた。驚くべきことに、何もないのだ。何回か通えばどの書店はどういう配置になっているのか、察しがつく。更に、どの店はどういった傾向に強いのか、どこにも置いてあるベストセラー

や大出版社の新聞といったものでない、特殊な本はどこにあるのかを心得る様になる。あとは必要に応じて書店を選べばよい。必要な時に必要な本が入手できる様にこちらの体勢を整えておくのである。そういう準備を済ませた上で、書店を活用する。その準備は、どの店のどの棚にどんな本がある、といっただけの知識ではいけない。書店の棚も生きているのだ。時々刻々、書店の棚の表情は変化している。新しい本が加わり、古い本が姿を消す。きのうまであった本がきょうはもう無い。しばらく見なかった本にまためぐり合う。そういう表情の変化は通い続けていると自然に判るようになる。ハッキリ意識しなくとも感じる様になるのだ。書店はまた、出会いの場でもある。一冊の本を捜しに行つて、全く種類と傾向を異にする別の本と遭遇する。探求書よりもっと良い本を見出すこともある。鼠兎の出版社から出ているというだけの理由で、全く関心のなかった分野の本を手にし、買ってみたいもする。今や、書店通いを通して、書店の生き様と付合うことそれ自体が、僕の人生の一部、それも可成り重要な部分となっているのだ。生活空間の中に、書

店があればそれでいい。“魅力的な書店”は僕には必要じゃない。魅力的な書店との付合い方これが大事なのだ。与えられたテーマの答に、これでは全くなっていないかしら。

片隅にある一冊の本

匿名希望 C

七月の或る夜、例によつて、いきつけの飲屋にたちよつた。カウンターに腰をおろし、ノンビリ酒をのんでいたら、聞くともなしに、となりの話が耳にはいつてきた。

棚のならば方とか返品とか、そんな類のことをしゃべっている。四、五人のグループで、どうも、推測するところ、近くの書店ではたらいっている人たちがらしい。まだ二十代のはじめか、みんな若い。たがいにビールをつぎながら、あの本はいいが、これはダメだなどと、侃侃諤諤、さかんに泡をとばしている。そばでひそかに拝聴しつつ、本屋さんも

大変だなと、感心した。

ちかごろ、書店への風当たりが強いときく。新聞や雑誌で、世の識者が苦情をのべる。たとえば、とりわけ店員の教育がなっていないという。彼あるいは彼女に、もとめる本の有無をたずねても、なかなか要領をえない。さんざん待たされたあげく、おもとめの本はありませんと、ツメタイ返事がかえってくる。さらにしつこく迫ると、はたして、露骨にいやな顔をされる。いきおい、客の足はしだいに遠のく。

しかし、本当だろうか。いささか、誇張しているようだ。こうした情景は間々あるにしても、さほど多くはないだろう。かえつて、書店員の商品知識はかくだんによくなっているのではないか。もちろん例外はあるにしても、かくも大量の新聞洪水に溺れもせず、日々、新顔の本につきあつてゆく根気には、ただもう頭がさがる。ちょっと書名を知らなかったことくらいで怒るなんて、実にもうしわけない。

本が好きである。われながら常軌を逸している、ときに思う。毎日、日課のようにし

て、あちこちの本屋をのぞく。といって、いつも買うわけじゃないが。とにかく、旅に出てもまず探すのが、新刊ならびに古書の店、それにおいしそうなコーヒートの店。まあ、そのくらいに、好きである。

ところで、だいたい、どこの本屋も店先にはベストセラーと新刊をおく。とうぜん、いちばん客がむらがる。これはどうも見苦しい光景だ。デパートの特売場みたいで、うるさい。心ある者、軽蔑しないまでも、サッと一瞥するくらいで足早に通り返るべきである。店の「個性」というものは、かかる戦場にはけっして顔を出さない。奥ゆかしいのである。

一年ほど前のことだが、研究社から出ている、福原・山岸両先生の手になる「国語新辞典」をどうしても欲しくなつて、探したことがある。これは、ローマ字で引く変つた辞典だが、中味のほうも、知る人ぞ知る、ユニークなものである。で、まず版元に問い合わせたところ、あいにく品切という。あきらめきれずに古書店を何軒かまわり、なんとか手に入れた。ところがなんと、その後、池袋の新刊をあつかう書店で、同じものを見つけたので

ある。どうして版元品切の本があつたのか、いまだに不思議だが、ともかくこの店には仕入れの神様がおられるものと恐れ入った。ヨモヤあるまいとあきらめていた本を、書店の棚に見つけるのはまことに嬉しく、さすがはプロと脱帽したくなる。

書店の、人のむらがらない片隅の棚、ここらへんが大切だと思う。目立たないけれども、本屋の価値をきめる場所である。一冊の本をもとめて、人がめざす辺境の地といったところか。ここを支配しているのは、商品価値ではなく、文化価値である。いずれ慧眼の主にあたること必定の本がならぶ。量より質、狭いコーナーを粗末にはいけない。

回転と利益の問題だけなら、ベストセラーや文庫にまかせよう。大宣伝もしてくれる。しかし、あまりにも速い回転は、人間の精神にとって有害である。疲れる。いきおいのよい自転車も、早晚、倒れるだろう。こうした時代だからこそ、ゆったりした速度と場所を少しでも確保したい。いずれ、カメはウサギに勝つのである。

神田あたりを歩いていても、それぞれの書店が特別な企画を立てたり、雑誌のバックナ

ンバーを揃えていたりして、がんばっているなと感じさせる。こうしたことは、客の関心を惹きつけるすぐれた刺激であるが、やはり肝心なのは、一冊一冊の価値に気をくばり、それらの本をいつも、片隅でもよいから、さりげなく棚に入れておくことではないのだろうか。どんな本をおくか。さあそれはビールでも飲みながら、店の人たちがアレコレ話して合つて決める問題だろう。(みすず書房)

人間のやさしさをもつ書店

小林 登美枝

打てば響くといった、キビキビした対応が要求されるのは、商売の世界にかぎったことではない。だがとりわけ、物を売る立場の人間に対しては、この敏感な対応ぶりが望まれるのである。

たとえばある商品について、買手側から質問があつたとする。一着のドレスを買う場

合、生地素材はなにか、メーカーはどこか、このファッションは今シーズンのトップ・モードか、洗濯は家庭でできるかといったどのことは、品質表示のあるなしにかかわらず、買手側としてはたしかめたいところだ。もしこのぐらいいのことに即答できない店員がいたとしたら、買手側の購買意欲はとたんに削がれてしまう。その店のイメージ・ダウンともなる。消費者の本心からすれば、こんな商品知識ゼロの相手から、やむを得ずモノを買うときほど、イヤな気分はないのである。

書店といえども同じことだ。

店頭で客がアノ本コノ本と書名をあげても、いつこうピンとこない気のぬけた店員がなんと多いことか。(とくにマンモス書店というのに多い)「ちょっとお待ちください」と、いちいちチーフらしい人物に伺いをたてるような接客態度を見ていると、ジリジリすることがある。何年も前に出た本とか、特殊な専門書といったものならそれも仕方なからうが、まだ出たばかりの新刊書のことでもまるきり雲をつかむような顔をされると、こちらにはシラケざるを得ない。「もうけつこうで

す」と、その店をとび出すまでのことだ。

たまたまこんな客の一人となつて、私は思うことがある。あのなにをきいても分からないう店員は、たぶんアルバイトだろう。だから経営者は店員教育らしいものも与えず、ただ店番をやらせればいいと考えているにちがいない。若いものはやかましいことをいえば、逃げ出してしまふ。せいぜいが万引防止の役目をしてくれたら、御の字ということか。

それにしてもあの店員の若者は、どんな気持であそこ働いているのかしら? かれは学生? 浪人? 失業者? それとも見習店員? ——世をしのぶ仮りの職場? (まさか!)、たとえ明日は別の世界で生きる人間のつかの間の労働とはいえ、働くからにはもつと自己の職分をつかんで働けないものか。だが、こんなふうな言い方は、経営サイドの論理とうけとられそうである。

しかし、もしあの若者が私のむすこだとしたら、私は躊躇なく、「もつと気合いをいれて働け」と、叱るにちがいない。

なんにつけても買いつけの店というのがあるように、私などは馴染みの書店のほかに、ほとんど利用することはない。本というものは

は古本は別としてどこで買つても値段は同じ・値切つて買うものではない。バーゲン・セールというのも、あまり聞いたことがないし、おまけの景品がつくということもない。買う身にとって、およそ愛想のない商品であるからには、せめて気分のいい店で買いたいと思う。それも電車やバスに乗ってゆくところではなく、居住地にそんな書店があればありがたい。

その点、私の買いつけの書店は、私にとつてまことに魅力のある書店である。馴染み客を大事にしてくれるが、フリーの客に冷淡というわけではない。ベデランの店員がそろっているもので、こちらがときどきうるおぼえの書名を口にしても、たちまちカンを働かせて正確な書名を復唱してくれる。ずいぶん以前に出た本でも、出版社と著者名をそらんじていて、適切な対応をしてくれる。必要な本を手にいれる窓口としての機能を、十分にはたしてくれている。

おまけにここの店員の中には、常客の好みをよく心得た寿司職人が「今日はいいヒラメが入ってますよ」などと、客の気をひくようなあんばいで、「この本はいかがですか」

と、こちらが見落している新刊書を勧める商売上手がいる。それがたいいこちらの必要とする書物であることは、あっぱれな売人である。この書店に感心するのは、売ることが上手なだけでなく、店員が人間のやさしさをにじませていることだ。立ち読みのチビっ子が入り口のドアに近いところにいるのを見て、「そこは出入り口で危いから、もっとこちらで読みな」と、子供の事故防止(?)にも気をくばる。

常連の私などは、立ち読みでことを済ましてしまおうというケチな魂胆で、えんえんと一冊の本をひねくつていくことがある。そんなとき、「こちらで椅子にかけてお読みになったら……」などと、声をかけてくれる。こちらは簡易図書館にでもいるような、気分になっってしまう。

こんなとき、つい図にのって、「この頁のどこをコピーにとつてもらいいたいな……」と、店内の商売用の複写機を、横目で眺めてみたりする。(まさか、図書館ではあるまいし!)——とどのつまりは、その本を買って帰ってくるのが毎度のことである。

(著述家)

階段の途中の小さな書店

平 川 俊 彦

渋谷駅界隈で、僕の行きつけの書店といえは、大盛堂、紀伊国屋、三省堂、旭屋等の大型書店のほか、渋谷書店、友好堂、そして嘉茂書店といったところである。帰りは、麻布三ノ橋からバスで渋谷に着くのが大体七時前後になる。その時刻にまだ開いているのは旭屋以下の四店で、なかでも旭屋と嘉茂書店が駅に近いし、九時から九時半頃まで開いている。どうしてもこの二店が一番の行きつけ、ということになる。

嘉茂書店というのは、井ノ頭線の改札口を出て、すぐ右手の階段をおりと、中二階の踊場の一番奥に、コイン・ロッカーやトイレと隣り合わせになっている小さな本屋さんである。入口の看板には「DPE」とともに、大きく「構内売店 新刊・書籍・雑誌」とあ

って、「嘉茂書店」という名はその右下にごく小さく書いてあり、大抵はその上に新刊のステッカーが貼られていて、まず満足に読めない。入口の手前右手はタバコ売場だから、間口の正味は二間あるかないか、奥行も三間弱といったところ。ただ、内部の左右の奥行は四間ほどあって、見た目より中は広い。入口の大半は雑誌の平台で占められ、それを見下す位置にカップ・ブックス等を置にした「番台」という感じのレジがあり、年輩の店主と二、三人若い店員が立っている。こういうと叱られるかもしれないが、一見、書店というよりは立食いのソバヤに近い雰囲気なのである。いつも立て込んでいて、「一丁上り、毎度あり」の声でもかきそう。事実、応対は威勢がよい。また、開店前の準備中でも気持よく店内に入れてくれるし、客の目の前でこれみよがしにハタキをかけることもない。(本を売るよりもハタキをかけるのが商売みたいな店が多い。)

店内は天井から足元まであらゆる空間がまことに効率よく利用されている。「番台」の頭上には、『タイム』等の英文雑誌がクリップで斜めに吊されており、店の左手奥、つま

り「番台」の背後には三疊間ぐらいのスペースがあつて、文庫本と新書がおかれている。岩波・国民文庫等を除くほとんどの文庫本が互いの境もハッキリしないまま、びっしり並べられている様は、ちょっとした見もので、しかも天井にとどくあたりには、B6や四六の新刊も並んでいる。客が立てる余地は畳一枚半ぐらい、大人六人でもう一ぱいといった感じになる。新刊書は、入って正面の棚に並んでいるわけだがこの棚の前にも細長い平台があつて、カメラ・映画関係の雑誌や旅行ガイド・ブックがおかれてゐるから、ヌード写真をバラバラしている人の背中ごしに棚を物色することになる。狭いとはいえ、サンヤツに登場する新刊一般書の大体は顔を見せるし、そのうえ、みずず、筑摩、晶文社、朝日、中公等々、点数は少ないが結構まとめて並べてゐる。なお最近、タバコ売場を少し縮めて、本の部分を拡張した。

地の利はたしかに抜群で、通勤途中にちょっと寄るには実に便利である。だから決まった本をさがす人よりも、帰りの電車の中で読む何かおもしろい本はないかな、と思つて覗く連中がほとんどであらう。特定の本を求め

る場合なら、あるなしをズバリ聞いた方が早い。大書店の若い店員とはちがひ、この店主の応答は的確、即座に用がすむ。

もちろん、クーラーのきいた大書店で散歩でもするような買物とはわけがちがう。低い天井に扇風機が四つ回っているが、お世辞にも涼しいとはいえない。肩肘ぶつかり、他の客の足と足の間、頭と頭の間を覗きこむ。駅の発車ベルや振動も伝わってきて、帰りの時間も気になる。どうしようか。スジつめの井ノ頭と小田急の車中、本なしですまされるか。――まことに、一服の清涼剤を求めるような気持で本をさがす。

こうして僕が嘉茂書店で求めた、山口昌男『本の神話学』、五木寛之『風に吹かれて』、坂口安吾『散る日本』、ビュトル『時間割』、同『心変わり』、植草甚一『ぼくの読書法』、スミス『いたずらの天才』、原勝郎『東山時代における一縉紳の生活』、丸谷才一『文章読本』、ジェローム『ボートの三人男』、白崎秀雄『北大路魯山人』、E・クイン『Yの悲劇』、折口信夫『全集第15巻・民俗学篇I』等々は、しばし帰りの車中の不快感を忘れさせてくれたのである。

たとえば、植草甚一氏の書店めぐりに彩りをそえているのは、「戦果」を一杯のコーヒーとともに味わう書店のならばの喫茶店である。ヴァルター・ベンヤミンは、蔵書の荷解きをしつつ、書物それ自体との出会いの回想とともに、「たんまり見つけものをした都市の想い出」にひたる。僕にとつてもまた、渋谷道玄坂、階段の途中の小さな書店は、つい寄り道してしまふ店であり、脳細胞までうだるような暑さ、電車や人の靴音やその他あらゆる駅の騒音、肩にくいこんでくるシヨルダ―・バッグの重さ、とともにある。三〇分ほどの間に、これだという本をさがし出すしさかの緊張感とそれを得た満足感、あるいは手ぶらで店を出る失望、いわば本との出会いの妙を端的に味わうことができるのが、この書店の味といえようか。

――ある朝、開店準備中の店に立ち、小柄で精悍な感じの店主に聞いてみたら、創業は、なんと僕の生まれた年と同じであった。棚の並べ方など年季が入っているわけだ。ずっと同じ場所にあるが、戦後駅ビルが改築される前は、「こんなに大きくなかった」そうである。

(法政大学出版局)

私と書店

小 川 博

私はたいして意味もなく本を買うくせがある。それは借りた本を読むのが、なんとなくいやなこと、図書館は何んとなくおちつかないからであるが、やはり自分の本にしたいという気持があるからであろう。しかしどういうものか、古本は好きではなく、どうしても必要であるということがなければ、今でも古書店で本を買いもとめることはない。しかし昨今はどこの書店に行っても、ほぼ共通した本が並べられているが、買うつもりはなくても、店に入って眺めることはしばしばある。しかし、どういう本が売れるのかということについては、書店の店番として立ったことのない私にはわからない。あるとき、近所の子どもの頃から行きつけているD書店の御主人にお客の注文帳を見せてもらったことがあ

ったが、注文された本は、まづ小説と文学のものばかりであった。とくにテレビで放映されている番組の原作らしいものが目立ったようであった。このD書店は山手線の北部のところにある駅近くにあり、大正二年とかに開店したという老舗であり、私は初代二代三代とつづいた主人はみな知っているし、大東亜戦争の前も、戦中も、戦災をうけた戦後も、時勢の変転のなかに店の位置はいくたびか移ったが、いつも書店の灯をともしつづけていたことも知っている。私の子どもの頃のその店先の入口近くには三省堂あたりで刊行した中学生向けの学習参考書の棚と、岩波文庫の棚がおかれていたし、奥の主人のいるあたりに、語学の辞書類が並んでいた。真中のあたりの棚は、講談社の出した少年読み物の棚があったことを思い出す。子どもの頃の友人I君は小遣が多かったのであろう。この書店でよく本を買っていた。彼は戦災にあわなかったから、今でもその頃の本をもっているかもしれない。

昭和二十年の戦災でこのあたりはまる焼けになってしまい、住んでいた人々は四散してしまった。やがて敗戦戦後の経済混乱は、こ

のあたりの復興を遅々としたものにしていった。戦後のある日、もとの場所からかなり離れた焼けのこりの地域の昔からある金物屋の店先にこのD書店が店を開いているのをみてびっくりし、ああ健在なのだなあと思ったりした。まもなく私も、焼跡の地にもどると、だいたい状況のかわった駅近くに再びもどったD書店を見出し、それからまた足繁く寄ってみている。戦後の出版物は軽装で数もすくなかったが、やがて店の売場も広まり、本も多くなっていた。私としてはいろいろな本をこころで手に入れてきたが、いつも愛想よく応対して下さる書店の御一家の方々の好意はありがたく感じている。しかし買うばかりではない、いわゆる立ち読みのくせも、子どものときから消えることもなくつづいているので、店頭で立ち読みさせて頂いた恩恵はかり知ることではできないと思うが、これはまたD書店にとっては、おそらく迷惑なことでもあったろう。どうも本という商品は広告をみてから計画して買うという場合はすくないものらしい。広告をみて書店にかけつけていても、本を手にとってみると買う気のしなくなるものもあるし、なにげなく手にとって

みて買いたくなるものもある。これは本を買う人々にそとときいてみると、多かれすくなかれ、そういう気持をもっているともいう。

出版に従う友人が、どういう本が売れるか書店に出してみなければわかりませんよと言ったが、これと同じことは先日、台湾で出版業を営む人からも聞いたことがある。そういえば、私の乏しい海外旅行の経験でも、パンコク、シンガポール、香港、台北、ソウル、ローマ、アテネ、ジュネーブ、ベルリン、パリなどの書店の店頭の本の並べ方、お客の立ち読みなど、雰囲気は日本のそれとたいしてかわらないみたいであった。ロンドンのチャリングクロス街のフォイルズという四階建ぐらゐのビルを占める大書店も、レジの所が、ボックスになっている他は、この頃、東京でみかける大型書店と形態はよく似ている。もつともそれは東京の方が、フォイルズをまねているからかもしれない。またジュネーブのモンブラン広場近くリエビエ街のナビエ書店には、仏書、独書、伊書、英書がそれぞれのコナーに並べられてあったのもスイスらしく、たまたまベルリンの街角ではいつてみた書店が仏書ばかりであったこと、パリのブ

レンタノ書店にはいったらそこは英書部であったこと、アテネの目抜き通りの書店が英書が主でギリシア語の書はほんのひと並べであったことなども思い出される。しかしこのよゝうな世界各地の書店でも、本を買う人、立ち読みする人、本を探がす人、なんとなく、同じような雰囲気を感じられるのは、書物のもつ万国に共通したあるムードがあるからであらう。本屋さんを取りまく世界は、思ひのほかよく似ているのではないかと思う。

(早稲田大学講師)

期待したい大型書店

匿名希望 D

九月一八日にオープンする東京八重洲ブックセンターに私も大きな期待を寄せているものの一人であるが、聞くところによると実効坪数を七五〇坪に縮小せざるを得なかったということには、色々な事情があったこととは

思うが、何か残念に思う。しかし、書店はただその坪数が多ければそれで良しとするものではないし、限度は有るもののその坪数が少なければ少ないの良さもその店主の配慮ひとつによって出せるものでもある。ただ、大型書店といつても従来の大型書店はその特徴をフルに発揮するということよりも、中小書店の方式なりをそのままの形で、ただたんに売場面積を大きくしただけの書店が多く、つねづね惜しいことと思つてゐる。その点、八重洲ブックセンターの場合は読者の希望なり出版社の要望なりを取り入れ、色々な点で新機軸を打ち出すということなので大いに楽しみにしている。

そこで、私もひとりの読者の立場から、このような書店は魅力ある書店ではないかと勝手な夢を述べてみたいと思う。ただし、この夢がすでに実行に移されているかも知れないし、八重洲ブックセンターの構想の中に取り入れられているかも知れない。もしそうであったとしたらお許し願うのみです。

どのような書店にとつても、書籍の平積販売は欠かせない条件の一つだと思ふが、その平積の面積を少なくして、書棚販売を中心と

することによって出来る限り書籍点数を揃えてもらいたい。そして専門書を数多く揃えると同時に専門書コーナーには椅子を置くなりして時間をかけて書籍の内容を十分吟味出来るように工夫してもらいたい。左手にカバンを抱え苦勞しながら大部な書籍に挑戦している図をよく見かける。そこで思うには、店内に簡単なクロックをつくってもらったらどうだろうか。

つぎに、つねに書店における問題として取り上げられていることに店員の商品知識の欠如がある。この基本的な問題を解決しなければならぬ。なにぶんバート・タイマーの店員が多い故、店員教育も大変なことであるので、それを解決する一つの方法として、少なくともベテランの読書相談員を一人、補助相談員を一人おくことである。そしてこの読書相談員の役割は、たんにお客が探している本がどのコーナーにあり、どの出版社の発行のものであるか等々について教えるだけではなく、そのサービスコーナーには各社の書籍目録や総合図書目録等を数セット常備しておき、お客が自分で本を探せるようにその検索方法を教えることが必要である。場合によつ

ては、コンピュータを導入することによって、さらに読書相談コーナーを充実させることも出来る。

今後、大型書店の進出はなにかといつて困難を極めるに違いない。そこで一つの方法としては地域との結びつき、すなわち公共性をもたせることである。その公共性の一つとして、ミニ図書館を付設するということはどうであろうか。書店と図書館は相反するもののようにも思えるが、長期的に見ればそうとばかりはいえないのではないだろうか。思うに一般公共図書館の多くは、その役割からいって小説・実用書・児童書・地域史等が中心であり、また国立国会図書館等の大図書館はなにかと利用しにくいということを経験している方も多いことと思う。そこで付設ミニ図書館になにを期待するかといえは、いろいろなことが考えられるが、その一つをあげると、新刊の専門書、地方で出版されるものも含めて出来る限り数多く揃えて閲覧出来るようにしてほしい。その理由は先に触れたように公共図書館ではやや専門的な新刊書はなかなか購入してもらえないということである。そして、そのミニ図書館で一、二年経た書籍はそ

の地域の公共図書館に寄贈するというのはどうであらうか。

以上、大型書店に対する希望をいくつかあげてみたが、これらのことは目新しいものではなく、従来は利害関係や経営上の問題等のためその構想がえがかれたものの実行に移せなかったことではないかと思う。しかし、大型書店の必要性、社会的責任というのはいかえってそういうところにあるのであって、たんに売場面積が広いだけのものならば、あらたに必要がはたしてあるのだろうか。

(一編集者)

《弘報委員会から》

本誌の「特集」企画に対し、ご多忙のところをわざわざご執筆くださいました方々には弘報委員会として厚く御礼を申し上げます。また匿名を希望される向きも多く、その処理の仕方に編集上のマズさがございましたが、ご容赦くださいますようお願い申し上げます。

また、人文会および本誌に対するご意見、ご批判などございましたら、弘報委員会宛にどしどしお寄せくださいますよう。

■販売委員会

前号においてお知らせした如く、「人文図書」のセット販売”についてのアンケートを、去る七月下旬に各特約店さんに発送いたしました。すでに多くの特約店・展示店さんからご回答を賜り、有難く御礼を申し上げます。この集計の結果は次号においてご報告申し上げます。

一般的に書籍の売行きが低迷している状況ですが、人文書は比較的安定しているように思われます。都内の大型書店から、来春の企画として「人文会フェア」を予定しているというご連絡をいただいております。また、人文図書を増やし、売上比率を高めたいという書店さんからの会への協力要請もきております。地域読者の状況、商品回転の実態、期待される傾向等、充分にご検討のうえ、読書の秋に向け、人文図書の拡売をはかり、攻めの販売を行なわれてみてはいかがでしょうか。なお、会へのご相談がございましたら、ぜひ

販売委員会宛にご連絡下さいますよう、お願い申し上げます。

■特約店委員会

前号でご報告申し上げましたごとく、全委員社の常備店調査を目下進めており、集計の段階を迎えておりますので、近々その資料が整い、それを基に新しい特約店および準特約店の選定を行なう予定でございます。書籍なかにづく専門書・人文書の流通構造について、多くの問題を抱えておりますので、会員社の人文書の集中展示による拡売の効果を期待する向きも少なくありませんので、特約店・準特約店の皆々様には、ご協力の程をお願い申し上げます。なお本年12月発行予定の「人文会ニュース」22号には、人文会と特約店および準特約店との間において、相互に了解に達し、契約を締結した「特約店・準特約店」の名簿を公表する予定になっております。

●人文会定期研修会の日程を決定

本年度の定期研修会について検討をかさねてきましたが、去る八月九日の例会において、日程、訪問書店等について決定をいたしましたので、ここにご報告申し上げます。

日程Ⅱ本年一〇月三日より七日まで。

訪問地および書店Ⅱ宮崎市（田中書店・りいぶる宮崎）、鹿児島市（坂口金海堂・春苑堂・ラザ店・鹿児島大学生協・春苑堂本店・旭屋書店・吉田書店）、熊本市（紀伊国屋熊本本店・長崎書店・まるぶん書店・金興堂書店・バスセンター金興堂）、長崎市（好文堂書店・好文堂支店）。

なお、訪問申上げる書店各位には、販売委員会、特約店委員会を通じて、訪問時間等につき前もってご連絡申し上げますので、ご多忙中恐縮には存じますが、何卒よろしくお願いを申し上げます。またその折りには、会および会の活動等につきご意見、ご要望等ございましたら、ぜひお聴かせ賜りたく存じます。

■宣伝委員会

本誌20号で紀伊國屋書店の寒川さんが書かれている「人文書の新聞の売り方について」のなかで、人文書は、まず入荷時に素早く少部数が動く、若干停滞した後、二、三ヵ月経過してから再び動きだし……と人文書の動きの実態を的確に指摘しておられました。日本の社会では各階層の所謂オビニオン・リーダーの人文書の新聞の漁り方は、積極的に貪欲ともいえましよう。田川建三先生の「どの言語で考えるか」を巻頭に「新刊案内」第10号（9月10日付）をお送りいたします。秋の読書シーズンが始まります。どうか有効にご利用ください。

■弘報委員会

「人文会ニュース」21号をお届けします。ご覧のごとく、本号から従来の横組みを改めて縦組としました。読みやすいようにと配慮したつもりですが、なお号を逐って改善を図っていきたいと考えておりますので、ご批判なりご意見なりをどしどしお寄せ下さい。

×

「特集・読者にとって魅力ある書店とは」というテーマで、原稿を募りましたところ、評論家の小林登美枝氏、早大講師の小川博氏、日本読書新聞社の外山純一氏ほか多くの方々から興味ある原稿をお寄せ頂き、ここに有難く御礼を申し述べさせて頂きます。

×

狙いとしては「書店における魅力」の条件をもう少し掘りさげてみるつもりだったのですが、必ずしも「ツボを得た」ものとなり得えなかったきらいがあります。それはもっぱら弘報委員会のテーマの設定のしかたおよび依頼のしかたに不十分な点が多かったことによるもので御執筆下さった方々には真に申し訳なく存じます。よろしくご寛恕の程をお願い申し上げます。

第22号では、会員社の「本年度のわが社の人文図書」として、一九七八年初頭から一年間に発行された人文図書の紹介と来年度の企画および方針の一端をそれぞれ披露してもらつております。また、各委員会の活動報告も充実させる所存です。

■筑摩書房は当分「休会」に

人文会々員社「筑摩書房」は、すでにご承知のごとく、去る七月一二日に会社更生法の適用を申請し、財産保全の仮処分決定をみており、目下、再建のための方策を検討中と書いております。去る八月七日の人文会幹事会において、筑摩書房の向山・伊藤の両氏が出席され、その間の事情を説明され、当分の間、人文会の活動に参加しえなくなった旨の報告があり、休会届が提出されました。当会としては真に残念なことではありますが、一日も早い再建を期待することとして、八月九日の例会で、これを受理いたしました。従いまして当面、人文会の活動は一九社で行なうてまいりますので、よろしくご協力の程を。

●須長・相田・柴田三氏の出版を祝う会

人文会代表幹事の相田氏ら表記三氏の共同執筆による『出版販売の実際』（日本エディタースクール出版部刊）の出版記念会が、去る九月四日、出版クラブで業界関係者多数の出席のもとに盛大に行なわれました。

好評発売中

象徴と解釈

1800円

D・M・ミラスマッセン／久米博訳 エリアーデとリク
イルの方法を援用しつつ、象徴の持つ多面的、多層
的な価値、及びその社会的政治的変革の役割を考察

哲学と精密科学

2300円

E・カッシーラー／大庭健訳 ガリレオ、デカルト、
ニュートン等の自然認識を西欧思想史の中に丹念に
位置づけることで、近代科学の成立・本質を検討。

フョイエルバッハの哲学

2800円

E・カメンカ／足立幸男訳 人間の尊厳を謳った彼
の思想を、そのきらめくアフォリズムと洞察的文体
の丹念な考察を通して、生き生きと現代に甦らせる

紀伊國屋書店

東京都新宿区新宿3/電話(354)0131

青木教育叢書

須藤敏昭著

¥1400

遊びと労働の教育

遊びや労働経験を奪われた子ども達の発達
が大きな社会問題となっている今日、子ども
の発達段階にそくした適切な指導のあり方を具
体的に追究し、保育と教育における現代的課題を
創造的に解明した意欲作!

丸木政臣著 教師とはなにか

1000

丸岡秀子著 現代の家庭と教育

1000

青木書店 東京神田神保町1-60

勁草書房

吉本隆明全著作集(続)6

源実朝(作家論1) 將軍実朝の詩心と境涯を
解明。全15巻・第2回配本／一五〇〇円 200

人間と意味の解体

足立和浩著 二つの中心テーマに即して説く
近代合理主義の解体の地平。一八〇〇円 200

詳伝 シモーヌ・ヴェイユ I

S・ペトルマン／杉山毅訳 未刊の資料・手
紙を基に生を照射。全2巻／三三〇〇円 200

悲劇の時代

多田利男著 西欧文明の視角からみた巨匠群
像。自己観照のひとつに。二四〇〇円 200

東京都文京区後楽2/振替東京5-175253

心理学とマルクス主義

—アンリ・ワロンの生涯と業績—
●ザノ著／波多野完治・真田孝昭訳
児童心理学を拓き、心理学を弁証法
的唯物論で基礎づけ、発展させたワ
ロンの全貌を直弟子が解明。¥1400

討論 宗教の新生

—社会変革へのかかわり—
●日隈威徳編 伝統宗教と新興宗教
の教義と現実、宗教とマルクス主義
の対立と共同を、哲学者、宗教者、
宗教社会学者が率直に論究。¥1200

大月書店 東京文京本郷2-11
振替東京3-16387

豊かな心をはぐくむ日本の民話の集大成

双書 日本の民話

既刊68冊・別巻4冊

県別・地方別に全国を網羅した日本の民話集大成／原話の持味を生かしわかりやすく再話／さし絵多数・わらべ唄併録／対象は小学生から大人まで
●A5判上製カバー装／全巻定価総合計1781・50円(セット販売中)
大庭 良美編

石見の民話

一集・二集

東京文京小石川三の七
電話814・5521

未来社

島根県西部・石見の海岸部の「牛鬼」や「影ワニ」、山間部の「山姥」などをはじめ、地方色の強いものを選んで、一・二集に収録。
最新刊日本の民話68巻・各価1200円

図録東西文化交流史跡

斎藤 忠著

A5判／三二〇〇円

シルクロードを探訪し、自ら撮影した四二三枚に上る写真を主とし、都城・仏塔・墳墓・文様にかけて、東西文化交流の史跡を説く。日本古代文化の源流をたずねるために考古学者としての著者が、たくましく意欲を示した力作。

民俗研究ハンドブック

宮田 登他編

四六判／一五〇〇円

民俗の研究をこれから始めようとする人々に、各分野における今日までの研究の成果と残された課題を詳細に提示する本格的研究入門書。隣接諸科学の研究者にとって、は民俗学の現水準を理解するためのよき参考書。

吉川弘文館

113・東京都文京区本郷7-2-8／電話03-813-9151(代表)

人文会々員名簿

青木書店／山根義 大月書店／鈴木弘 紀伊國屋書店／
八木茂 勤草書房／石橋雄二 現代思潮社／安藤豊 社
会思想社／鎌塚正 春秋社／根津栄二 晶文社／中村勝
哉 誠信書房／穴戸玄徳 東京創元社／清水純孝 東京
大学出版会／別所久一 日本評論社／醍醐隆 福村出版
／福村惇一 平凡社／八木田三郎 法政大学出版局／
阿部好文 みすず書房／相田良雄 未来社／石井奈良彦
有斐閣／前田昌男 吉川弘文館／川越重行(以上19社)
●役員 会長／中平千三郎 代表幹事／相田良雄

有斐閣双書

小辞典シリーズ

心理学小辞典

大山正・藤永保・吉田正昭編 二二〇円

正確な内容・簡潔な解説・最新のデータによる待望の辞典!!
心理学にたいする幅広い関心に応える学習辞典の決定版
心理学の全分野から二五〇項目を網羅し、小項目主義によつて簡潔・明快に解説した学習辞典。適正な項目の選定を行ない、古典的な概念から情報科学用語までを網羅し、関連科学の用語も広く採り入れている。巻末には、学習に便利な詳しい欧文索引も付した小辞典の決定版である。

憲法小辞典 社会学小辞典

伊藤正己ほか編 一三〇円 濱島 朗ほか編 一八〇円

東京神田 有斐閣 振替東京 6-370番

オーデン わが読書

W・H・オーデン 中桐雅夫訳 ひとつの
図書館のように、ヨーロッパを読む。ホメロ
スの叙事詩にはじまり、シェイクスピアのソ
ネット、グリムとアンデルセン、ワーグナー
の歌劇、ポーの『ユリーカ』、ゴッホの書簡集、
エリクソンの『青年ルター』など、一冊一冊の
本の面白さを興味おもむくままに語りつくす、
詩人の卓抜な読書案内。 新刊/3800円

■好評発売中

染物屋の手 W・H・オーデン 2800円

晶文社 東京都千代田区外神田2-1-12
電話(255)4501

現代思潮社

死体すりかえ

水本事件の真相

水本事件弁護団著

二二〇〇円

「水本事件」の第一審の決定は奇々怪々な事件の不気味な謎をさらに大きくふくれ上がらせた。陰惨にうごめく謀略犯罪を追及する全国民必読の書。□増刷出来!!

大数 龍介著 わが国での初の労作

二二〇〇円

マルクス、エンゲルスの国家論

東京文京・小日向1-24振東1-72442

シャーマニズム の世界

●桜井徳太郎編

社会・民族研究の専門家が
人類にとつてつねに新しい
課題を提供する宗教現象の
現況を報告し、今後の研究
展開に備える視点をも提示
した最良のハンドブック。

予価1100円
四六判上製
宮田 楠 和 宮 金 崔 劉 桜
田 井 家 折 泰 小 野 枝
正 登 弘 准 雄 博 萬 徳
正 弘 准 雄 博 萬 太郎

東京外神田 春秋社 (03)
2-18-6 255-9611

古代日本の復元をめざすシリーズ

日本古代文化の探究

全16冊 四六判 価1200~1500円

鏡

最新刊

四〇〇頁

価一五〇〇円

森 浩一編

日本の考古学、古代史において、鏡ほど重要な意味を与えられているものも少ない。本書は、その鏡の果たした役割について、諸外国の古代文化と比較し考察した労作。

既刊好評発売中

城 都 風 文 都 城
土 字 事 記
人 事 記

上田正昭編
上田正昭編
上田正昭編
上田正昭編
大林太良編

火 船 家 池 鉄 馬 墓 地

大林太良編
大林太良編
大林太良編
大林太良編
森 浩一編

東京・文京区 社会思想社 振東6-71812
本郷1-25-21 電話(813) 8101

58mm 220g
x 84mm 376g
24g
7-16D
H) 28g

梓101.

相良 亨

本居宣長

比類ない象徴性をおびて 近世日本思想の一つの極北を示す宣長 「道」を論じて 深い共感を現代に呼ぶ書下し

避けがたい死、現に与えられている秩序。神道はせんかたない安心であるという。肯定と否定とを貫く宿命的な二重の姿勢は何を意味するか？すぐれて近世日本の実存の示唆から学問と倫理のあり方を問う。四六判・一八〇〇円

東京大学出版会

113 文京区本郷東大構内 '78年版総目録呈

誠信書房

東京都文京区大塚3-20-6

脳の言語

K・H・プリブラム／須田 勇監修 神経心理学の原理 脳とこころの問題に焦点を合わせて、知覚・イメージ・感情・期待・注意などが脳のどのような働きによるのかを多角的に論じた待望の名著。 六五〇円

看護・医療の歴史

J・A・ドラ／小野泰博・内尾貞子訳 看護の発展や 実際の技術から、複雑な専門職への移行・展開といった魅力ある物語を十三の各章にわたって述べた 医療歴史の決定版。写真二六〇余点を所収。四八〇円

日本評論社

新聞の秘密

清水勝人著 九八〇円

名東孝二 著
室本誠二 著
一五〇〇円

税

消費者の税制を考える

「ゆりかごから墓場まで」はイギリスの福祉社会を示す言葉だが、日本では「ゆりかごから墓場まで」税金がついてまわる。本書は日本の税制の不公平をどう正すか、歴史と現実とに照らして平易に解説。

東京都新宿区須賀町14／振替東京0=16

創元選書

B 6 判上製

日本考古学概説

小林行雄著

1000

倫理学初歩

桑本 務著

1200

改訂増補 哲学初歩

齊藤信治著

1300

アメリカ史研究入門

中屋健一著

650

概説 西洋史

衣笠、田村、中村、廣實著

1400

概説 現代史

今津 晃著

1400

日本文化史

サンソム福井利吉郎訳

1800

東京創元社 162東京新宿新小川町

非売品